

2008 日経ビジネスより (抜粋)

工業高校が地方小都市を再生する (1) ~ 「こんにちは」が自然に響く元教育困難校



人口3万人のまち、長井。玄関口の長井駅の風景もどこかのどか(撮影・佐藤)

東京から山形新幹線で約2時間半。温泉とラーメンが名物の赤湯駅で第三セクターのフラワー長井線に乗り換え、さらに約40分。冬場にはかなりの積雪がある山々に囲まれ、最上川を中心に田んぼや野菜、果物の畑が広がる盆地にたどりつく。今回のレポートの主演である長井工業高校は、そんなのどかで小さなまちにある。

実は筆者には、工業高校に対する、ある先入観があった。率直に言おう。「勉強ができない連中が仕方なく進む学校」「派手な髪型や服装の不良が集まり、ケンカ騒ぎばかり起こしている学校」というものだ。しかし、これはあながち筆者だけの偏見ではないだろう。子どもころから親しんだテレビドラマやマンガの中でも、工業高校は決まってネガティブに戯画化されて描かれていた記憶がある。

ではなぜ取材先に長井工業高校を選んだのか。そこでは、ひとつの学校の改革と連動して、地域ぐるみのキャリア教育が行われているという評判を耳にしたからだ。結果、全国の教育関係者、まちづくり関係者から静かな注目を集めているのだという。いったい何が起きているのか。いまだぬぐい去れない「怖い」「荒れた」工業高校イメージにちょっぴり腰が引けつつ、大いに好奇心をそそられ、取材の旅に出た。同校の地元である山形県長井市は、山形県南部、西置賜地方の一角を占める。さかのぼれば、名君上杉鷹山の治世で知られる米沢藩の商都として栄えた歴史を持つ。しかし現在の人口は約3万人。高速道路も新幹線も通らず、中心部でさえ人影もまばらだ。地方都市の地盤沈下が叫ばれる昨今だが、ここも一見、どこにでもある、これといった特徴のない片田舎のまちに見える。長井工業高校もまた、プロフィール上は、何の変哲もない地方公立高校だ。

ヒット映画「スウィングガールズ」ロケでも使われたフラワー長井線に揺られ、市中心部の長井駅から一つ北上したあやめ公園駅で下車する。すると、目の前に長井工業高校の校舎が見える。まず驚くのは、形ばかりのゲートがあるだけで、学校の中と外をはっきりと分ける塀がないことだった。この高校は、文字通り、長井のまちと地続きにある。

実はこの「地域と一帯」ぶりこそ、同校の最大の特徴なのだが、その話は後にしよう。いずれにせよ、学校といえば外から訪れる者に対して固く身を閉ざしたたたずまいが普通なだけに、これはちょっと意外だった。校舎の外観もモダンで、勝手に想像していた暗く淀んだ工業高校像は、まず見た目ですぐ裏切られることになった。もう一つびっくりさせられたのは、時間待ちのため中庭にたたずんでいた筆者に、いきかう生徒たちが口々に「こんにちは」と声をかけてくることだった。

しかもこのあいさつが、いかにもとってつけたようなものではないのだ。ちょっと照れながら、どこか人なつこい、自然な「こんにちは」。制服の着こなしなどはイマドキ風だが、表情からは素直さが伝わってくる。それが長井工業高校の生徒たちの第一印象だった。



いったいこの人当たりのよさはなんなのだろう。そんな疑問を持ちつつ、さっそく渡部慶蔵教頭をお願いし、校内の様子を見学させてもらうことにした。そこで筆者は、先ほどのはにかみ笑顔とは一味違う、真剣な顔つきの生徒たちに出会った。

間近に迫った厚生労働省認定技能検定試験合格を目標に、一点を見つめ旋盤作業に集中する生徒。同じく本番の試験に向け、制限時間を設定して複雑な配管作業に取り組む生徒。県内の大学が主催するコンテストに出品予定の建築模型づくりに励む生徒。電動カートの全国大会をめざし、チームの仲間たちと議論しながら製作に取り組む生徒。自作のマイコンカーをリモコンで自在に操り、大会に備える生徒。電気工事士をめざし、ケーブル工事の実習準備を行う生徒……。

長井工業高校の4階建ての校舎は、4つの学科ごとにすみわけがなされ、その半分ほどがさまざまな設備の備えられた実習室にあてられている。筆者が同校を最初に訪れたのは、夏休み中だった。にもかかわらず生徒たちは自主的に学校に詰めかけ、ときに教師の指導を仰ぎながら、専門的テーマに心底熱中していた。その雰囲気は、同じく夏休みに受験準備の補習を行っている高校とは対照的に明るく、開放的だ。

案内役を買って出てくれた渡部教頭は、いわゆる教師っぽさを感じさせない人物だ。取材への対応は、東北人らしく実直。ところが教室をまわり生徒に接する様子は、あけっぴろげで実に親しみやすい。「課題は計画どおり進んでいる？」 「試験直前の対策は立てられた？」 と声をかけていく。生徒たちも冗談まじりの笑顔で言葉を返している。そのようすは、高校の先生と生徒というより、むしろ大学の教員と学生の関係に近いようにも思えた。



長井工業高校の渡部慶蔵教頭（撮影・佐藤）

正直なところ筆者は、「評判の工業高校」と聞いて、生徒の力を厳しい指導で引っ張り上げるタイプの学校を想像していた。ところが長井工業高校に漂う空気は、それと正反対ののびのびムードなのである。そこで渡部教頭に、この点から尋ねてみた。

「ちょうど技能検定試験の直前準備や校外のものづくりコンテストの課題づくりの時期なので、みんな自主的に休み返上で頑張っていますね。いま教室にいたのはほとんど3年生。あの子たちは、放っておいても目標に向かって頑張れるところまで成長しています。だから教員は、手取り足取り余計な口出

しをせず、必要なときだけサポートするようにしています。ただ正直、学校に入ったばかりの1年生では、なかなかああはいかないんです。そこが悩みどころなんです」

この発言は、謙虚な教頭らしい控えめの学校評価と思える。しかしよく考えると、もともとさほど意欲の高くない生徒たちにも、入学後の3年間で自立して学ぶ力を身につけさせられるという静かな自負の裏返しとも受け取れる。

目標設定と動機付けはなぜできたか？

「特別な何かがあるわけではないんです。ただ子どもたちは、適切な目標設定と、それに対する動機づけがうまくできれば必ず成長する。入学時の受験学力に関係なく、どの子にも必ずそれだけの潜在能力がある。うちの生徒を見ていると、そう感じます。幸い工業高校では、ものづくりという生徒たちの興味関心をひきだしやすい活動を学習テーマにすることができます。これは工業高校ならではの有利さなのですが、本校は、おそらく他の工業高校以上にその強みを生かしているのではないのでしょうか。」

長井工業高校のキャリア教育の全体像、どのようにしてそれが実現したかなど、改革の詳しい解説は、次回以降に行うことにしよう。ここではまず、渡部教頭がいう同校の二大特色＝「ものづくりのおもしろさを伝える」「その意欲と関心を適切な目標設定に結びつける」キャリア教育の象徴的活動を紹介しておく。それは、すでに何度か触れた、工業技術者・技能者向け国家資格「技能検定」取得をめざす取り組みだ。技能検定は、金属加工、一般機械、電子精密機械、建設など幅広い分野の137職種について、国がその技能を証明する資格だ。等級は特級、1級、2級、3級に分かれる。長井工業高校では、旋盤、電子機器組み立て、建築配管などについて、高校生のチャレンジ目標とされる3級のみならず、上級資格である2級にも毎年多数の合格者を輩出している。

「2005年度には27名（2級5名、3級22名）、2006年度には42名（2級7名、3級35名）、2007年度も36名（2級7名、3級29名）が合格しました。これはいずれも県内トップ、全国でも有数の成績です。本校の1学年定員が160名、その中には技能検定に直接関係のない学科の生徒も含まれることを考えれば、かなり高い数字とっていいと思います」

長井工業高校からは、この他にも、全国工業高等学校長協会主催のジュニアマイスター制度、各種ものづくりコンテスト、コンクール等の合格者、上位入賞者が多数生まれている。こうした生徒たちのものづくりの基盤を支える実践的技能、課題にチャレンジする高い意欲は、着実に地域社会から評価を得ている。結果、同校の卒業生は、地元である長井市および山形県西置賜地域の製造業への就職に圧倒的な強さを誇っている。

「卒業生の約4割が進学、残り6割が就職の道を選び、就職者のうち9割～9割5分が県内企業に進んでいます。それでも特に長井市の中小企業の社長さんたちからは、『なぜうちの会社には新入社員を寄こしてくれないのか』とお叱りをいただいている状況です。うれしい悲鳴といったところでしょうか」（渡部教頭）

「卒業しても地元になりたい」

むろん、新卒者の就職状況は、そのときどきの社会の景気動向の影響を大きく受ける。製造業全体で人手不足感が高まっている現在、工業高校出身者が引く手あまたなのはさほど特筆すべきことではない。よってこれだけを見て長井工業高校のキャリア教育がすぐれた成果を上げているとは言えない。しかしそれらの事情も踏まえた上で、筆者は次の二点を強調しておく。

まず一つは、長井工業高校が地元＝山形県、長井市等の企業で高い評価を得ていること。そして生徒たちの多くも、生まれ育った地での就労を視野に入れて学習に励んでいることだ。現在、地方都市でこうした教育と産業の相思相愛状態が成り立っている事例は珍しい。この点については、渡部教頭もこう述べている。

「かつてはこの長井からも、多くの若者を都会に送り出していました。長男が家を継いで、その他の子は県内県外に出て行くパターンが普通だったんです。ところが少子化が進むにつれ、地元志向が強まっています。親は、老後を考えるとできれば子どもに残ってほしい。子どもも、都会への憧れをあまり持たなくなった。仕事さえあれば地元のほうが豊かに落ち着いて暮らせるといいます。学校としては、卒業後も地元になりたいという生徒には、その希望をかなえる進路を一緒に探るのが使命。今はある程度その循環がうまくいっていると思います」

ひとつ留保しなければならないのは、コメント中の「仕事さえあれば」の部分だ。日本の地方都市の多くは、この条件を満たす状況にない。長井工業高校のキャリア教育に特殊な部分があるとすれば、「地元には仕事がある」という前提によるところが大きい。仕事があるからキャリア教育が成り立つ。地元の産業を成り立たせるために地域の学校がしっかりしたキャリア教育を行う。そうした循環構造が成り立っているのが、長井の特徴なのである。

「希望」と「自信」は教育で身につけられる



ポイントの二点目は、長井工業高校で学んだ生徒が、進路選択を行う上でもっとも重要な「希望」と「自信」を身につけて卒業していていることだ。「希望」「自信」とはいかにも抽象的な表現だが、長井工業高校のキャリア教育が、単に進学率アップ、就職率アップをめざす多くの学校の進路指導と一線を画しているという話である。この点についても、のちに同校卒業生のエピソードを紹介するなどして、できる限り深く考えていきたい。

さて、この長井工業高校。現在では着実に教育実績を上げているが、ほんの十数年前、1990年代前半あたりまでは地域で悪名高い教育困難校だったという。偏差値による序列化によって、他に進学先がない子どもたちが多く入学し、生活指導は困難をきわめていた。渡部教頭は、苦笑まじりに振り返る。

「太いズボン、髪を派手に染めたツッパリは珍しくなかったですし、校内のあちこちにタバコの吸殻が転がっていました。教員は必死に生活指導にあたっていました。生徒に背中を向けたらいつ殴られるかわからないとまで言われた学校だったんです」

不本意入学者、中退者も多かった底辺校が、今では子どもも親も競って入りたがる、地域でかけがえのない存在感を示す高校に変化した。その過程には、さまざまな要素、多くの人の尽力があった。

工業高校が地方小都市を再生する (2) ~教育を守るヒントは「七人の侍」に

「一番強烈に印象に残っているのは、生徒の集団授業ボイコット事件です。ある朝、いつものように教室に行ったら、生徒が人っ子一人いないんですよ。びっくりして外に飛び出してみると、校舎の入口に3年生の番長グループが立ちふさがり、下級生たちに『帰れ、帰れ』と指示している。タバコ、万引き、ケンカなど生徒たちが巻き起こすトラブルには慣れているつもりでしたが、さすがにこれには参りました。1980年前後のできごとだったでしょうか」

ものづくりを通じて生徒たちの意欲を引き出し、国家資格である技能検定試験などの目標を与えて挑戦させることで力を伸ばす。前回、そんな長井工業高校の実践が、地元企業への就職に直結するキャリア教育として機能しはじめているようすを紹介した。

同校のここに至る道のりは決して平坦なものではなかった。わずか十数年前まで、いわゆる教育困難校に分類される、問題山積の学校だったのだ。在職歴の長い渡部慶蔵教頭(2008年4月より同校校長。以下略)は、かつての生活指導の苦闘をあれこれ語ってくれた。冒頭に紹介したエピソードはその一つである。学校としての秩序が根本から覆りかねなかった長井工業高校が、現在では地域の希望の星になりつつある。再生の歴史を振り返ってみよう。

長井工業高校の創立は1962年。東京オリンピックを間近に控え、日本が本格的な経済成長を加速させようとしていた時代だ。当時山形県は、大企業の工場誘致を盛んに行うなど、農業県から工業県への転換をめざしていた。長井市も、戦前設立の東芝長井工場を前身とするコンデンサメーカー、マルコン電子の企業城下町として大きく発展しつつあった。同社を核に多数の町工場が経済の土台を形づくるこの地に、県立の工業高校が誕生したのはきわめて自然な流れだった。

以来、長井工業高校は、毎年着実に中堅技術者・技能者を供給し続け、地域で大きな存在感を持つ学校になっていく。今日、長井の産業界では、石を投げれば長井工業高校のOBに当たる状況だ。地方都市では、歴史ある工業高校、商業高校、農業高校等の人脈が地域社会に深く根を張り、特有の重みをもつケースがしばしば見られる。長井市における長井工業高校も、まさにそうした位置づけの学校である。

しかし、1970年代後半から1980年代に入るところから、長井工業高校の教育は困難に陥る。髪を派手な色に染める、太いズボンをはく、校内での喫煙、小さな暴力沙汰など、生活指導の対象となる問題行動が目に見えて増えた。「不良が集まる学校」と見なされるようになるにつれ、落ち着いて生活を送れる雰囲気は急速に失われていく。